

祈りと魔術

牧師 山本 護

「わたしの道を守ろう、舌で過ちを犯さぬように。神に逆らう者が目の前にいる。わたしの口にくつわをはめておこう(詩編 39:2)」。詩人は、神に反逆する己を自制して沈黙しますが、苦しみがつのって胸の内を吐露します(39:3~4)。そして「わたしは黙し、口を開きません。あなたが計らってください(39:10)」と再び沈黙を試みますが、「主よ、わたしの祈りを聞き、助けを求める叫びに耳を傾けてください(39:19)」と、言葉が漏れ出すように祈ります。なんとも率直な詩人だなあ、とその不器用さに心打たれます。

この窓辺で私も、詩人のようにたびたび沈黙し、詩人のようにたびたび祈ります。それにしても「祈り」とは何なのでしょう。G.サンタナーヤ(1863~1952 スペイン=米国)という思想家は次のように語っています。

「祈りの本質は詩であり、表現であり、瞑想であって、人間が祈りを、対話する二人の間にかわされる散文的かつ商業的な意見の交換に似せるにつれて、だんだん無意味なものになっていく(宗教の理性)」。祈りは詩であって散文ではないのか。「言語には理性以前の使い方があって、なかでも詩歌と祈りは、その主な用法である」とサンタナーヤは言います。それゆえに祈りは「神なる存在との対話」ではなく、いわば「ひとりごと」なのだ。確かにそう言われてみれば、あの窓辺で沈黙し、祈っていた時、神に語りかける感じではなく、むしろ「ひとりごと」であったような気がします。

元旦にクルマで走っていると大きなケヤキ群を見かけ、ふと思いついて初詣してみました。参拝者がごった返す神社ではなく、静かで清らかな地域の氏神さま。ただ黙礼するだけの御挨拶でしたが、人々は何を祈っていたのか。四字熟語で分けてみれば、家内安全、祈願

成就、無病息災、商売繁盛、悪霊退散、世界平和などでしょう。

初詣での祈りと、キリスト教の祈りでは、いったい何が違うのか。「神を動かす呪術」ではなく「神に従う祈禱」というのがそれなりの答えでありましょう。サンタナーヤはこうも語ります。

「祈りは魔術であり、そうであるからには効き目がなくてはいけない。期待通りの解決か、そうでなければ、その代わりに受け入れなければならない解決がしばしば与えられる」。期待外れの解決をも受け入れていく覚悟までが「祈りの効きめ」だと言うのでしょうか。だとすれば、人間の願望を超えて神の内に在る、というキリスト教的な「祈りと御心の一致」とそう違うものでもない。商売っ気のない素朴な氏神さままで感じた、爽やかな気づきでした。Ω

